

道心



心の持ち方 幸と不幸の巡り合わせは 心の持ち方にある

禅昌寺住職 横山 正賢

修証義第三章 受戒入位

第十二節

もし薄福少徳の衆生は三宝の名字をおききたてまつらざるなり、いかにいわんや帰依したてまつることをえんや。いたずらに所遍をおそれて山神鬼神等に帰依しあるいは外道の制多に帰依することなかれ。かれはその帰依によりて衆苦を解脱することなし。はやく仏法僧の三宝に帰依したてまつりて、衆苦を解脱するのみならず、菩提を成就すべし。

もし不幸にして三宝の御教えに出会うことが無ければ、三宝に帰依する縁もいただけないだろう、その縁と拠り所を失って所遍（迷信）に惑わされ、道理に沿わない山神鬼神の虜となって惑わされ、真実を外れたまや

かしの館にはまり込み、諸々の迷いにもがき、苦しみから解放されることは無いであろう、早く真実の教えに目覚めるならば、衆苦を解脱するのみならず、三宝の利益に活かされている己に目覚めて安らぎを得ることを示唆されています。

迷信に惑わされる一例を紹介してきて、「先祖供養が足りてないので供養の法要をして欲しい」と。この方のご両親はご先祖祀りを几帳面になさるお方ですが、子供さん達と接する機会はほとんどなく、ましてや宗教や信仰の話など聞かせたことは一度もありませんでした。

言われるままに法要を済ませて、話してみると、何か重苦しい悩みを抱えているようでした。「どうかしましたか?」尋ねますと、「息子が反抗して引きこもり、親に心を開いてくれない」人の薦めで祈禱師におがんでもらったら、「祖先の中に供養が足りてない」先祖さんがある、それが災いして、あなた達の親子関係を妨げている」と言われ、来山された旨を話されました。

現代社会はハイテクの時代とはいえ、人は迷いが深まり考えられる解決の方策を努力しても解決しないとなると、自分たちの努力では解決できない

目に見えない厄のせいにはがちです。またテレビの興味本位の番組などの影響を受けて、冷静な判断を失ってしまつのです。

三宝に帰依すると言つことは、私たちが活かされている真実のありように目覚め、その道理を学び、人々の支えを頂いて努力することによって多くの迷いは晴れるはずであります。

先祖祀りと言つことは、私という命を考えると、「祖先」をおろそかに出来ない、命の尊厳を思うとき報恩の行為として営まれるものであります。

言い方を変えますと、先祖祀りをおろそかにするような人は、自分の命のありように気が付かないばかりか、自然の恵みや計り知れない人々の恩恵に活かされていることにも気が付かないままに、生きていくということになりまして、自分という命の尊厳を自覚する思考や、深い思慮を損なつのではないのでしょうか。

従つて子育てにおきまして、子供を思いやる深い慈悲心をもって接することにも気が付かなくなつてしまつと言つことになりかねません。

同様に人間の幸せも不幸せも、三宝の教えに目覚めた人と、その縁に気づかない人とは、仏の慈悲の受け止めようも変わることでしょう。

光を伝えた人々

—よき人の歩かれたあとかたを尋ねて—



天地の姿が 教えや宗教の原点

愛知専門尼僧堂 堂長 青山俊董師

インド・マカダ国にある五山の一つ靈鷲山頂において、今日はお釈迦さまの大説法があるというので、大勢の人々が集まり、お釈迦様のお出ましを今か今かとお待ちしていた。

ほどなくして高座に登られたお釈迦さまは、携えられた一輪の白蓮華を拈じて「ニコツとほほえまれただけで何もおつしやらない。

文殊菩薩が進み出て、槌を力チツと打ち、「法王中の法王ともいっべきお方のこのよつな大説法を、全身心を耳にしてよくよく聴聞し信受するがよい」と聴衆に呼びかけられ、お釈迦さまはそのまま高座を下りられた。

お釈迦さまが何を示すつとされたかをピタツと受けとめ、「ニコツとされたのは摩訶迦葉さまお一人であり、「拈華微笑の話」として伝えられている故事である。

ある時、「拈華微笑というのは、何を意味するのでしょうか?」と質ねてきた人があり、私は「実物提示しようね」と答えた。

教えとか宗教の原点は、天地悠久の真理である。小さく地球だけをとりあげてみても、地球の歴史は四十六億年といわれている。この四十六億年を一年に換算すると、地球の人類が出現したのは十二月三十一日の夜十時過ぎだといつ。その人類の歴史が四十五万年。

その中で人類が文化らしきものを持ったのはわずか一万年。今日、世界三大宗教と呼ばれる仏教の歴史が二千五百年、キリスト教が二千年、イスラム教が千五百年。ついこの頃のことである。

人類が気づくと気づかないにかかわらず行われている天地悠久の真理。これを「法」という文字で表す。「法」はインドで「ダルマ」と呼

び「真理」と訳す。この「法」をお釈迦さまが発見したので上に「仏」の字をつけて「仏法」と呼ばれるようになり、キリストが見つけ出したので、キリスト教となったまでのこと。

この天地がどうなっているか、その中で人の命もどのようにあらしめられているか、つまり「いかにあるか」ということがわかれば、「いかにあるべきか」の答えはおのずから出よう。そこに教えが生まれる。それが「仏教」となり、それは人の道でもあり、実践道であるから「仏教」と呼ぶ。道元禪師が「仏法」「仏教」「仏道」と呼びかえられている深いお心を見落としてはならない。

すべての宗教の原点は、そしてわれわれの生きるべき教えの原点は、人類が出現するよりも遙か彼方より行われている天地の姿、それに気づく、気づかないにかかわらず行われている天地の働きそのものであり、こざかしい人間が、何もないとこから創り出したものではないといつところを、幾重にも心に銘記しておきたい。

内山興正老師は「火」という言葉と「火」という事実は違つ。「火」という言葉が事実なら「火」といつたとたん口が火傷をし「火」と書いたとたんに紙が燃えだすはず。いくら「火」といつても書いても、火傷もしなければ燃えもしない」とよくおつしやつた。

「火」という言葉は、「火」という事実を示す記号にすぎず、「火は熱い」とか「火傷する」とかいつ言葉は、実際の働きを説明する觀念にすぎない。記号や觀念を間にさしはさまず、直に実物をこの目で見、この耳で聞き、体験せよ、これが言葉を用いず花を拈じて示されたお釈迦さまのお心である。

勝友の庭

父親の

突然の死という逆境から

自分の生きる道に

出会った少年少女達

此処にご紹介する少年少女と私の出会いは、両親と長男中学三年生、長女中学一年生、次男小学四年生の頃だったと記憶している。

お父さんの仕事の関係で大分県から越してきた間もない頃であった。そのころの子供達は天真爛漫で、私がお盆などにお宅を訪問しても何時も屋外で友達と快活に遊ぶ子等で、向き合っ

て話をするなどということとは全く無かった。少年達の父親は無口で私と会話をすることもなく、尋ねれば応える程度だった。

父親は義父の家業を手伝って製材業に従事していたが腰を痛めたことが契機となって弟に事業を譲り広島に出てこられたという状況だった。

子供達と私が向き合っ

たのは、昭和六十二年十月五日少年達の父親が四十二歳で急逝されたことにより始

の運動会で、お父さんも運動会を見学した後の急逝であったから関係者の悲嘆は尋常では無かった。

しかしこの時の母親は悲嘆のなかにありながら、冷静かつ沈着に、葬儀など当面する諸問題を処理され、初七日・二七日・三七日と満中陰までの法要は家族が全員揃う夜七時前後に営み、子供達は四十九日の法要の時には既に般若心経・修証義を諳んじて読むまでに上達していた。

子供達は父親の三回忌頃までは、母親と共にお寺の法要にも参加し、お坊さん達の読経に合わせて軽やかに読経する姿に、法要に同席する大人達を驚かせていた。

三人の兄妹弟はいわゆる学業優秀という頭の良さではなく、学業も優秀だったのかも知れませんが、私が感じていたのは、素朴な感性の豊かな、頭の良い子供達だと感心していた。

特に中学生の頃の次男はガキ大将の雰囲気を持ち快活な子ながら、百人一首を諳んじる程の

記憶力の勝れた子という印象だった、しかし少しも衒わぬ無邪気な少年だった。

長男は早く母親を楽にさせたいという気持ちが強かったのか、彼は既にすっかり自分の生き方を持っていた。工業高校を卒業すると地域の優良な上場企業に就職し今では中堅社員として開発研究員として逞しい一児の父親となっている。

長女は健康を損ねていたお父さんの苦しむ姿を目の当たりにしていた事に影響されてか、国立看護学校に進み、ナイチンゲールにあこがれる優しさで、しっかりとした人柄が、すてきな男性に見初められ、看護学校卒業間もなく結婚し、若くして三児を授かり、いまは子育てに専念中のようである。

次男はアメリカの学校へ行くための費用を稼ぐために始めたアルバイトの仕事が、彼の持ち合わせていたキャラクターが合ったのか、今では当時の経営者から営業権を譲り受けて若者向けの音楽バーのオーナーとなり、よき伴侶も得て広島では個性派のお店を軌道に乗せつつある。

兄妹弟の結婚式には主賓として招かれて、この家族を突然おそった、あの悲しみの日からの歳月、母親の無我夢中に生きられる力強い生き様と、子供達の逞しく生きてこられた姿を思い起こすと、感涙にむせぶのである。

この間お母様はお寺の行事にはほとんど欠かさず、時には子や孫も一緒に参加されてる。

その姿には「私の人生全て仏様にお任せしています、仏様に授けられたこの命、素直に頂いて精一杯に生きています。」を感じている。

「勝友の庭」管理人の喜びである



道心・趣味の会

短歌

乙女らの居並ぶ様さまののびやかさ
「品格」など気に留めず明るき

千田町 庚午北町 被爆前の
昭和に住む町 老いて尋ねる

東区 矢野 淑子

俳句

月おぼろ仏在ますと仰ぐなり
野を焼いて吾が追憶は果てしなし
子の倅を祈るほかなし難飾る

当山二十一世 甲田良由(苔水)

立春の土やわらかく凍みにけり
弁当に菜の花色の卵焼き
川柳水なめらかに堰を越ゆ

廿日市市 伊藤 順一郎

梅薫る尼僧の声の透きとほる
手作りの雛にも供ふ雛あられ
楽しみは母の愚痴聞く春炬燵

東区 青笹 俊枝

行事報告 (一月～三月)

年頭坐禅会
一月一日 午前八時より坐禅
近年参加者が数名と少なくなり寂しい、以前は新年に当たり「坐禅」でもして身心を新たにし一年に望もうという気風があったように思う。

修正会

十時より恒例の大般若祈祷会、多数の参拝者を得て、一年の家内安全無病息災を祈念する。

青山俊董老師講演会

二月二八日(土曜日)

大勢の参加者が熱心に老師のユーモアを交えられた分かり易いお話しに耳をかたむけ一日法悦に仕上がった。

彼岸法要・護持会総会

三月十四日(土)

百五十名余のご出席のもと彼岸法要並びに、護持会総会と檀信徒懇親会が営まれた。

行事案内 (四月～七月)

西国三十三観音霊場巡り

・四月十八日(土)～十九日(日)

この度は第一回となり一番札所三番札所まで。紀州和歌山県が中心となります。まだ席に五・六名の

の余裕があります。ご参加をお待ちしております。

参加費 下記ご案内の通り

お盆前諸堂大掃除
七月二十六日(日) 午前十時より
お子さんお孫さんと一緒にご奉仕下さい。

毎月定例行事

日曜坐禅会

毎月第一日曜日 午前九時より

上田宗箇流茶道稽古日

毎月一回 第二又は第四金曜日の

予定 午後一時から

お抹茶と和菓子を気軽に楽しむつもりでご参加下さい。

御詠歌の会

第一金曜日午前十時より自主練習

第四金曜日午前九時より講師を招いて練習 昼まで

茶道の稽古及び御詠歌の稽古は講師の都合により変更する場合もあります。初めて参加される方は、お寺に電話にてご確認下さい。

毎週定例行事

暁天坐禅会 月曜日・金曜日

毎朝午前五時十分～五時五十分まで

水曜坐禅会

午後七時より坐禅・茶話会 終了八時半

婦人坐禅会 毎週金曜日

午後一時より坐禅・茶話会終了三時

(第一金曜日のみ坐禅の後 写経・茶話会)

西国三十三ヶ所観音霊場参拝(第二)

平成21年4月18日(土)～19日(日)

集合場所 JR広島駅新幹線口

(ホテルメッセ広島玄関前)

集合時間 午前6時50分(時間厳守)

4月18日(土)

7:00 広島駅

7:10 不動院前

7:20 中筋駅

7:25 広島IC

山陽・近畿・

阪和自動車道

12:00 海南IC

12:15 (2) 紀三井寺

13:15 海南IC

13:30 海南IC

14:00 阪和自動車道

14:30 南紀田辺IC

16:30 勝浦温泉 泊

4月19日(日)

8:00 勝浦温泉

8:30 (1) 青岸渡寺

9:35 那智の滝

10:50 橋杭岩

12:30 田辺 昼食

13:15 南紀田辺IC

14:00 和歌山IC

14:30 (3) 粉河寺

15:15 泉南IC

16:15 阪和・近畿・

山陽自動車道

20:10 広島IC

20:20 中筋駅

20:30 不動院前

20:30 広島駅

勝浦温泉
ホテル浦島
☎0735 362-1611
旅費：33,000円
個室希望：5,000円増

原稿募集

皆様の随筆、旅行記、体験談、趣味の短歌俳句など何でも結構です。お寄せ下さい。